論　文

同志社女子大学スキーキャンプについての研究

濱　口　義　信
同志社女子大学・現代社会学部
現代こども学科
教授

A Study on the DWCLA Ski Camp, 1985-2007

Yoshinobu Hamaguchi
Department of Department of Childhood Studies,
Doshisha Women's College of Liberal Arts,
Professor

はじめに

同志社は専門的学問だけでなく人格形成を建学の理念としており、カリキュラム以外の様々な課外活動を奨励、実施している。その中でいくつかの全学的な宿泊を伴う行事的活動を行っており、さまざまな学部・学科や学年の学生が生活と活動を共にすることによってより幅広い人間性を育てる活動となっている。現在行われている主なものとしては、サマーキャンプ、スプリングキャンプ、会津若松・安中・函館ツアー（以上学生部）やリトリート、ワークキャンプ（宗教部）などがあげられる。

これらの中に、1985年度から2007年度まで23年間実施されたスキーキャンプがある。このプログラムは、特に前半の10年間ほどは、90人の定員に対して早朝から学生が行列を作り、多数のキャンセル待ちが出る人気行事であった。本論文は、本学の歴史の一部としてこの行事を記録として残すと共に、特徴や意義などを確認し、消長の経緯を検証しようと試みたものである。また、この作業を通して、大学における教育活動の一環としての行事活動のあり方を見直し、これからの本学の教育を考えていく参考にしたいと考えた。

資料の中心として用いたのは、スキーキャンプに際して毎年作成されていた「しおり」や「文集」その他の配布資料などである。特に「しおり」は事前に作成され、参加者名簿やプログラムなど基本情報がまとめられている。また活動終了後に作成された「文集」はキャンプでのそれぞれの活動の報告と参加者の感想などがまとめられている。また、各年度の具体的内容等については、このキャンプを中心になって運営した野崎康明（元本学教授）や運営に携わってきた学生部の職員のメンバーにも必要に応じて聞き取り調査を行った。それに、1986年度からは（2002年度を除く）著者もこのキャンプの運営やスキー講習に携わってきたのでそこでの経験も含めてこの論文をまとめた。その他にも学生部からは様々な資料の提供と協力を得た。

先行研究として、スキーキャンプについて論じたまとまった文章はないが、共通性の高い行事であるサマーキャンプについて、小坂がその準備段階から活動内容を紹介している記事は、実際の本学のキャンプ・プログラムの流れを理解するのによい資料である。（小坂、1986、23-31）

Ⅰ．スキーキャンプ実施の背景と経緯

スキーキャンプ実施に至るまでの背景や経緯を、学生部の資料や、野崎への聞き取り調査を中心にまとめると以下のようなものであった。

Ⅰ.1　社会的背景と本学における状況

本来スキーは積雪の多い地域において、移動手段として

始まり、交通手段が改良され、生活が安定していく中でその地域に住む人々のレクリエーションとしても楽しまれるようになった種目である。

特に我が国においては、第二次世界大戦戦後の復興が進み高度経済成長が続き、生活に少しゆとりも生まれ始める中で、1964年に開催されたオリンピック東京大会に続き、1972年には冬季オリンピック札幌大会が開催された。この大会は当然のことながら日本中の関心を集め、その中心種目であったスキーもスポーツとして人々の注目を浴びるようになったといえよう。さらにこの頃から人々の生活が豊かになることによって余暇が増大し、運動不足による健康問題が顕在化する中で、余暇におけるスポーツ、そしてその一つとしてのスキーも注目されるようになっていった。

スキーの普及と共に、本学でもスキーが取り入れられていった。1973年に本学に着任した野崎によれば、以下のようなものがあげられている[注1)]。

① 1973年にはスキー同好会が学生を募集してオープンスキーが開催されていた。
② 同志社教職員組合でも数年間スキーツアーは行われ、その後も女子大の教職員有志でお正月のスキーツアーが続けられていた。
③ 1977年２月に体育の特別授業（集中講義）としてスキー実習を行うようになった。

このような動きの中で、学生部からの働きとして、1980年度に学生部からの「起案書」によって「冬季キャンプ」が企画され、キャンプ委員会としては当該年度からの実施の意向が示されているが、現実には実施されなかった。これが学生部における最初の取り組みであったと考えられる。（鴛渕、1980）

Ⅰ.2　教育基金による「スキー実習」、「同志社女子大学スキー実習」の実施

スキーに対する取り組みが高まっていく中で、大学予算によって試行的に行われる「教育基金による援助」を使ってスキー実習が実施されることになった。まず、1983年度には一般教育から野崎が実行責任者となって教育基金による援助が申請され、1984年２月から「スキー実習」が行われた。「教育基金に関わる援助金」申請は「申請書」と「交付願」の２種の書類が提出される。教育基金は申請されたものが審査・査定され採否が決定されるものなので、申請の規模・内容と実行された計画内容は異なる場合もある。そしてさらに実施年度末には教育基金で行われた他の活動と合わせて、「実績報告書」が印刷・配布される。ここではそれらを合わせてこのプログラムの概要を整理する（以下同様）。

〈名称〉　スキー実習
〈目的〉　１．スキー技術の習得を通じて、学生の体位向上及び、身心の健康増進を図る。
２．自然的環境における共同生活を体験することにより、自然との接触、教師と学生及び、学生同士の人格的接触を深める。
３．本学の精神的伝統の体験学習
〈日程〉　1984年２月27日～３月３日
〈場所〉　長野県北安曇郡白馬村岩岳スキー場
〈参加学生〉　38名（引用部分の人数表記は「名」のままである。以下同様）
〈スタッフ〉　引率教員３名、引率職員２名、スキー指導講師３名（野崎、1984、p.17）
〈内容〉　現地ではスキーの実技習得を中心に行い、さらに冬山の自然観察・雪国の生活等の体験をさせる。また本学の伝統に基づいた宗教教育、教職員、学生との共同生活を通じての体験学習をさせる。（野崎、1982b）というものであった。

申請時80人を構想した企画であったが、諸般の事情で募集定員を40人に設定して募集が行われたが、「募集初日午前中に60人を越える状態であった」（野崎1984、p.17）と報告されている。

この成功を受けて、1984年度には「学生部が主催を引き継いで」（小泉、1985、p.10）、「同志社女子大学スキー実習」という名称で「教育基金に関わる援助金」を申請して実施された。ここでも各種書類を基にスキー実習の概要を確認しておこう。

〈名称〉　同志社女子大学スキー実習
〈目的〉　１．スキー技術の習得を通じて、大自然の中で学生・教職員が共同活動を行うことにより学生同士・学生と教職員の交流を深め、学生の人格の向上をめざす。
１．プログラムの中に宗教行事を含むことにより、少しでも学生に建学の精神を

認識さす。

1．学生の体位向上及び身心の健康増進を図る。

〈日程〉　1985年３月４日（月）～９日（土）
〈場所〉　白馬岩岳スキー場　長野県北安曇郡白馬村北城「白馬岩岳山荘ロシュ」
〈募集人数〉　70名（実際参加者は68名）
〈参加教職員〉　６名
〈技術指導講師〉　４名（以上小泉、1985、p. 10）
〈主な内容〉
・スキー技術の習得
・共同生活の体験
・自然観察
・朝拝、夕拝等の宗教的行事
・グループレクリエーションの指導及び参加の体験学習（小泉、1983a）

このような新しい試みを実施する理由や教育的効果は次のように説明がなされている。

①　出願理由：

「近年他大学では課外教育の意義を認め、キャンプ・スキー教室・海外旅行・リーダーズキャンプ・特別講座等学生部主催の行事が数々実施されている。本学でもキャンプが例年実施されているが、ここ数年参加者が多く、とくに今年は希望者全員が参加できない状況であった。このように課外教育に対する学生の反応の大きさと、課外教育の必要性を考えると、本学としてもプログラムの数を増やす必要があると考えられる。そこで、冬期の健康作りに適したスポーツであるスキーを通じて、大自然の中で、キャンパスでは得ることの出来ない体験を学生に与えたく出願する。」（小泉、1983b）

これを項目でまとめると以下の３つをあげることが出来る。

a. 他大学でスキーを含め学生部主催の行事が実施されている。
b. 本学のサマーキャンプに人気が高く希望者全員が参加できないので、学生の反応の大きさと教育的意義から増やす必要がある。
c. このため、冬期に追加するキャンプ・プログラムとして、健康つくりに適するスキー実習を行いたい。

②　教育上の寄与：

「本学では学生の人格の向上を育成するためキャンプ・修養会等課外教育を行っており、今回出願したスキー実習もその一環である。したがってスキー実習も単なるスキー技術の習得のみならず、スキーを通じて学生に建学の精神を認識させ、学生の自発性を養い、さらに本学構成員としての連帯の輪を広げることが目的である。学生部としてはこの目的にそってスキー実習を行うことにより、少しでも多くの学生が有意義な学生生活を送れるよう寄与したい。」（小泉、1983b）

教育的効果として、既に行っている各種課外教育と同様に、単なるスキー技術の習得だけでなく、

a. 建学の精神の認識を高める
b. 学生の自発性を涵養する
c. 本学構成員としての連帯の輪を広げる

まとめとして、学生が有意義な学生生活を送れるよう寄与する
ことを挙げている。そして、学生部が主催するにあたっての特徴として「サマーキャンプの運営方法を積極的に取り入れたこと」（小泉、1985、p. 10）だと総括している。

Ⅱ．スキーキャンプの内容

「スキー実習」、「冬季キャンプ」として教育基金によって試行され、活動の意義や内容が確認されたため、人気の高いサマーキャンプの冬季版として「スキーキャンプ」という名称で1985年度から学生部主催の通常の学校行事として毎年開催されることになった。ここでは、同志社女子大学で行われたスキーキャンプの内容を整理する。

Ⅱ.１　場所と施設：

スキーキャンプが実施された場所と宿泊施設は以下のように変遷した。

①　1985年度　長野県北安曇郡白馬村岩岳スキー場（白馬岩岳山荘ロシュ）
②　1986から2003年度：新潟県妙高高原池の平スキー場（東京 YMCA 妙高高原ロッジ）
③　2004から2007年度：長野県志賀高原横手スキー場（木戸池温泉ホテル）

これらのスキー場はまずは初心者や初級者用のコースが中心になったスキー場であり、これは参加者のレベルに合

わせたゲレンデの選択である。宿泊施設も学校行事としての様々なプログラムが実施できることを考慮して選ばれた。最初の施設は参加者が増えて、収容しきれなくなったために変更された。次に、最も長く使用した東京YMCA妙高高原ロッジは収容人員の面で貸切り使用ができ、またキリスト教団体の施設であったために本学独特のプログラムにも使用しやすい施設であったために長く使用することになった。残念ながら、スキーキャンプ参加者の減少によって貸切り使用ができなくなり、プログラム運営に支障をきたすようになったので、変更することになった。最後のホテルは池や広場があったため雪像つくりや散策などのプログラムが追加され内容が豊富になったと言える。

Ⅱ.2　参加対象と参加者数の推移

全学学生対象とし、希望者が参加費を払って参加する学校行事活動として、様々な学部学科や学年の学生が集まって相互作用が生まれることと、スキー講習をはじめとする現実的な運営面を考慮して、1985年度の募集定員は80人に設定された。しかし希望者が多かったので1986年からは定員は90人に増やされた。その後の参加人数の推移を示したのが（図１）である。

具体的な参加者数を確認してみよう。ここで示した数字は「スキーキャンプのしおり」に依っている。そのため、申し込みからスキーキャンプ実施数日前までのキャンセルは反映されているが、直前のキャンセルは含まれていない。そのため参加者数の正確さには誤差があるが、募集に対する応募者数の傾向は確認できるので、本論文での目的には十分であると考えられる。スキーキャンプの参加者数は、募集定員80人であった1985年度の76人から始まり、募集定員が90人になった1986年から1996年までは定員が充足されていたが、その後着実に希望者が減少した。特に1986年から1995年までの10年間は参加希望者が多かったため、キャンセルを見込んで多めに参加を受け付けていた様子を伺うことが出来る。この時期には毎年多くのキャンセル待ちの学生が発生するため、早朝から申し込みの列が続くことが続いた。

我が国においてスキー人気のピークは1993、４年ごろだと言われている。スノーボードも含めると1998年までは人気を保ったが、2005年には活動実施者が約半数ほどにまで減少したと報告されている[注2)]。

本学のスキーキャンプも1997年以降は年を追って参加希望者が減少し、学生部も様々な努力をしたが、2005年以降参加者は20人台に止まったために、2007年を最後にスキーキャンプは終了した。キャンプの持つ教育的意義を継続させるため、現在はスプリングキャンプに衣替えして現在に至っている。

Ⅱ.3　運営組織

Ⅱ.3.1　スキーキャンプの運営組織

スキーキャンプは図２の組織図の通り参加者全員が組織されてプログラムが進められた。

Ⅱ.3.2　スタッフ組織

スキーは危険を伴う活動であり、学校行事としてはスタッフの充実も不可欠である。

まず、学生部行事であるから、学生部長を責任者として（委員長）、学生主任、学生部職員、そして看護師が必ず同行しスキーキャンプの運営全体を担っている。大学全体の行事であることから、学生主任以外の教員、学生部以外の職員も参加してサポートする体制でキャンプが進められた。一方、スキー講習も本学体育教員と共に外部講師にも協力を要請して行われた。90人の定員に対してのスタッフの数はおおむね以下のようなものであった。

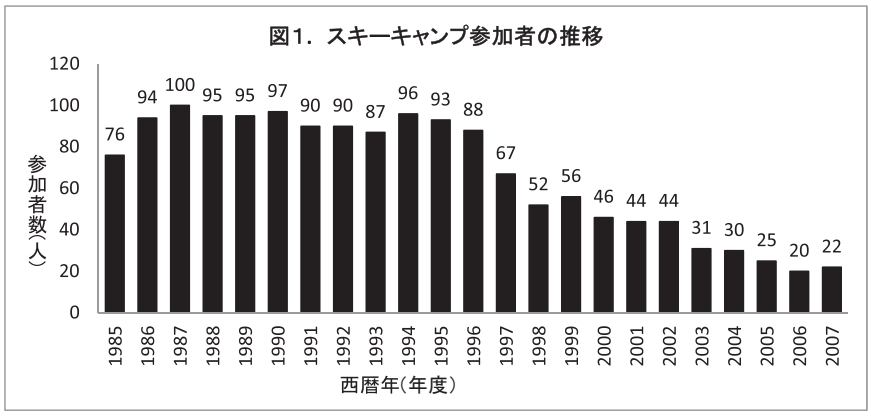
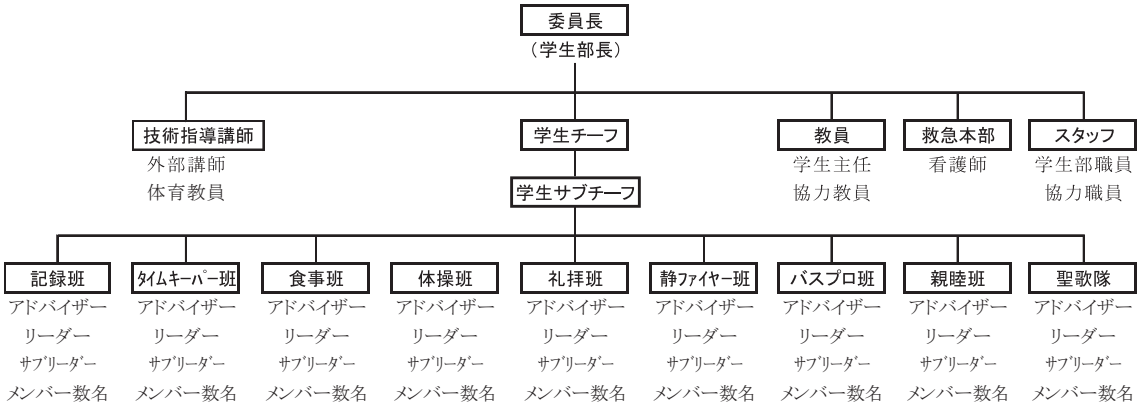


図2．同志社女子大学スキーキャンプ組織図



専任教員　　3人（学生部長、学生主任、協力教員　各1人）

職員　　4人（学生部職員2人、協力職員1人、看護師1人）

スキー講師　12人（体育専任教員含む）

Ⅱ.3.3　役割グループによる運営

学生チーフ・サブチーフ

学生全体のまとめ役である。学生部と連絡を取り合いながら各役割グループの活動全体を統括する。通常リピーターの上級学年生がこの役割を務める。しおりの作成やバス割、宿舎の部屋割りなどを担当する。

リーダー・サブリーダー

各役割グループ活動の中心になって、メンバーと協力して各役割活動を進める。これも基本的には、それぞれの活動に参加した経験のあるリピーターが配置されている。

アドバイザー

参加した専任教員（体育専任教員含む）はそれぞれの役割グループにアドバイザーとして加わり、役割グループ活動をサポートする。

各班メンバー

全ての参加者はいずれかの役割グループに所属し、スキーキャンプ・プログラム運営の役割を果たすことで、参加者全員で作り上げるキャンプにすることが意図されている。

以上のような個々の役割グループの活動は、プログラム内容に関わる部分が多いので後の項で紹介する。

Ⅱ.4　日程とプログラム構成

Ⅱ.4.1　日程・プログラムの大枠

23年の長期にわたって実施されたプログラムで、実施場所の変更に伴う変化と共に内容にも少しの変化はあるが、日程とプログラムの枠組みは全期間共通している。

日程は基本的に大学の長期休暇中である、2月後半から3月前半の月曜日の朝出発し、金曜日の夜現地を出発して、夜行バスで土曜日の朝に解散する5泊6日であった。（図3）

1日目の月曜日の朝、今出川キャンパスに集合・出発し、夕方に現地に到着する。プログラム内容は、2日目からの4日間にわたる午前・午後のスキー講習を中心に置きながら、開会・閉会礼拝、毎朝の礼拝、キャンドルライトサービスなどの礼拝が毎日配置されている。また、夜は日替わりで、スキー講習班ごとの講習内容のチェック・振り返り、自然とスキーに関する学習や親睦的プログラムが組み込まれた盛りだくさんの内容である。

以下に実際のプログラムについてそれぞれの内容を見てみる。

Ⅱ.4.2　日程とプログラムの具体的内容

(1)　スキー講習

最もコアとなる活動はスキー講習であり、キャンプ2日目の火曜日から金曜日までの4日間、午前9時前に宿舎を出発し午後5時前に帰ってくるまで昼食や休憩を含んで展開される講師によるグループ毎の活動である。講習初日午前中は、全体で講習を行いながら、事前の参加者の自己申告を踏まえて技術チェックをし、昼食時に能力別スキー講習班を決定する。午後からの3日半がグループ講習である。講習4日目最終日はすべてのグループができる限り山頂まで登り、スキーキャンプまとめのスキーを行う。初心者グループはゆっくりと完走をめざし、上級者グループは初心者メンバーのサポートをしながら、頂上からの滑走を繰り返す。そして午後はそれぞれのレベルに応じてスキーを楽

図3．同志社女子大学スキーキャンプ タイムテーブル

	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目・6日目
6:00		起床	起床	起床	起床
7:00		体操・礼拝	体操・礼拝	体操・礼拝	体操・礼拝
		朝食	朝食	朝食	朝食
8:00	集合				
9:00	出発（今出川）	スキー講習（全体講習・班分け）	スキー講習（グループ別）	スキー講習（グループ別）	スキー講習（グループ別）
10:00					
11:00	（バス）バスプログラム 昼食 トイレ休憩				
12:00		昼食	昼食	昼食	昼食
13:00		スキー講習（グループ別）	スキー講習（グループ別）	スキー講習（グループ別）	スキー講習（グループ別）
14:00					
15:00	到着				
16:00	開会礼拝	自由時間	雪像づくり（自由参加）	スノーシュー（自由参加）	入浴
17:00	貸スキー・ウェアー合わせ	入浴	入浴	入浴	
18:00	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食
19:00	全体ミーティング	班別ミーティング	班別ミーティング	自由時間	自由時間
20:00	親睦会	全体ミーティング	同女スノーフェスティバル	静ファイヤー	
21:00	入浴	自由時間	入浴	自由時間	閉会礼拝
22:00	消灯	消灯	消灯	消灯	出発
23:00					（バス）2/25(土)7:00 到着・解散

＊2005年度のしおりによって作成した（スノーフェスティバル、雪像づくり、スノーシューなどは後期に加えられたプログラム）

しんでまとめとする、というのがこの講習の内容である。

(2) 役割グループとその活動内容

スキー講習と並んで、参加者が役割ごとにグループを作って、スキー講習以外の活動が運営された。この活動がスキーキャンプ・プログラムの大きな領域となっており、それらの内容も簡単に確認しておこう。

① 記録班

キャンプ終了後にまとめられ、参加者に配られる文集の編集を担当する。原稿を依頼するために、出発前に文集内容を決定することも活動内容である。

② タイムキーパー班

毎日の起床連絡をはじめとするプログラムの時間管理を担当する。

③ 食事班

食事ごとの席決めなどを担当し、参加者がより多くのメンバーと知り合い、共通点を手掛かりに友達関係を作っていけるよう配慮する。食事の司会、食後のテーブルスピーチ（２人程度ずつ）の選任と依頼も含まれる。配膳等にサポートが必要な場合はその調整も食事班の役割となる。

④ 会合班と体操班

会合班はサマーキャンプにならって1993年度まで置かれていたグループであり、班別や全体のミーティング会場設定や茶菓の準備などを担当した。

体操班

1994年度から置かれた体操班は、毎朝の体操を考え、指導やリードを行う班であるが、毎年それぞれ振付の内容や音楽などユニークで工夫されたものであった。

⑤ 礼拝班

開会礼拝から閉会礼拝に至る各礼拝の会場設営、司会、礼拝の運営がその役割であり、学生奨励者の選定・依頼、讃美歌選定なども含めて礼拝をリードした。

⑥ 静ファイヤー班

スキー場で過ごす最後の夜に、キャンドルライトサービスの中でスキーキャンプ全体を振り返るイベントであり、最後には全員が同志社マークの形に並べられたろうそくに

火を灯して暗闇の中に同志社マークを浮かび上がらせるという、キャンプのクライマックス的イベントであるが、これの運営をするのが静ファイヤー班である。会場設定、奨励者等の選任・依頼、司会などがこの班の役割である。

⑦　バスプロ班

往復の長時間にわたるバスの中でのプログラムを担当する。特に往路では、自己紹介やゲームなどでバスのメンバーがよく知り合い、退屈せずに、スキーへのモチベーションを上げることが出来るよう様々なプログラムを企画・運営するグループである。

⑧　親睦班

キャンプ初日の夜に行われる親睦会のプログラムの決定と運営、会場設営が主な役割である。特にまだみんな知りあっていないために行うアイスブレークのプログラムである。

⑨　聖歌隊

礼拝や静ファイヤーなど讃美歌を歌う機会が多い。讃美歌を知らないメンバーも多いので歌のリードをすることがこのグループの役割である。また、静ファイヤーでは準備してきた合唱をみんなに披露することによって、プログラムを盛り上げた。

基本的に90人のメンバーに対して、学生チーフ・サブチーフを除いた10人弱のメンバーを一つのグループとして、協力しながらそれぞれの全体活動を運営していくように設定している。これは、キャンプの目的である、単なるスキー講習に終わらない活動経験を構成するためであった。1990年代後半からは参加者が少なくなり、2002年からは聖歌隊は組織されなくなり、複数の役割を一つのグループで担当するようグループ数が減らされた。

⑶　統一テーマ、主題聖句の設定としおり、文集の作成

充実した活動を確保するための仕掛けとして設定されていた、統一テーマと主題聖句の設定、スキーキャンプのハンドブックとしての「しおり」とまとめと振り返りとしての「文集」も毎回作成され、このキャンプ全体に大きな意義を持っていた。

まず、初回からキャンプのメインテーマとして、聖書から「主題聖句」が選ばれしおりのはじめに掲げられた。さらに1993年度には「主題」、1994年からは「統一テーマ」として、聖句を一言で表す、それぞれのキャンプのメインテーマが設定されるようになった。

これは、「キリスト教主義」という同志社の建学精神の教育というこのキャンプの目的を具現したものであるといえよう。いくつか例をあげると以下のようなものである。

「共生へのチャレンジ ── 神・人・自然と共に」(1995)
「挑戦～自分を高めるために～」(2000)
「共存～人と出会いつながり、自然と出会いつながる～」(2003)
“The Sense of Wonder” ～ feel nature and live together ～ (2007)

「しおり」も少しずつ内容は充実してはいるが、その初めから B6版50頁近くの冊子であり、「主題、主題聖句、学生部長挨拶、学生チーフ挨拶、宿の案内、組織図、タイムテーブル、部屋割り、物知りコーナー、スキーの歴史、スキーで使うことば、バス割、歌集」などがその内容になっている。後期においては、礼拝の式次第、聖書箇所、讃美歌などが入り、その代わりにスキーや自然学習のテキストが独立して別冊になったりしている。

「文集」は記録班の企画によって年ごとに少しずつ変化しているが、自己紹介、スキー講習の内容、学生と講師からの感想や報告、また、役割グループ毎の活動報告などがまとめられている。これも B5版50ページ程度の冊子が毎年作られている。

このような工夫も、活動内容に方向性を与え、意義を確かめるための機能を果たしていたと考えられる。

Ⅲ．スキーキャンプの特徴と意義

1985年度から23年間にわたって実施されてきたスキーキャンプであるが、ここではこのプログラムの特徴を整理し、それらの学校行事としての意義を確認しておきたい。

Ⅲ.１　参加者の分析から

参加者全体の人数とその推移はすでに確認したが、ここでは参加者の分布を中心に特徴を見てみたい。特にこの期間に学部の改組改編や、学科の新設が断続的に行われている点には注意が必要である。

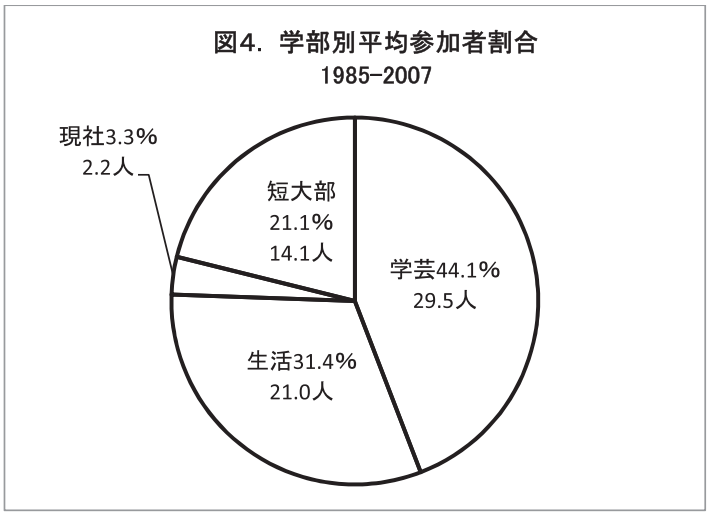
まず図４と図５で学部別の参加者を見てみる。23回の平均参加者数66.9人の内、学芸学部が44.1％（29.5人）で最も多く、生活科学部31.4％（21.0人）、現代社会学部3.3％（2.2人）、と短期大学部21.1％（14.1人）となっている。学芸学部が多いのは学部学生総数を考えれば妥当なことであろう。また、生活科学部も少しの波はあるが安定した数の

学生が参加していると言える。短期大学部は1986年の田辺キャンパス開設時に新設され、1999年で募集を停止し、その代わりに2000年から現代社会学部が同じ入学定員で新設された。短期大学部は２年制であり、現代社会学部が４年生までそろったのが2004年であることを考慮に入れると、人数的にはこの２つの学部を合わせた24.4％というのがもう一つのまとまりになると考える方が整合性があると言えるかもしれない。

参加者割合の年度比較を表したのが図５である。これを合わせて見ると、年ごとに多少の変動はあるが、全ての学部から一定数の参加者があり、学部の異なる学生たちが一緒に活動する場になっていたと評価できる。

また、参加学生の学年毎の割合は、１年生38.9％（26人）、２年生31.7％（21.2人）、３年生17.5％（11.7人）、４年生11.8％（7.9人）という結果である（図６）。全学年の学生が参加しているが、学年が上がるごとに参加者割合が減っている。４年生が少ないのは、卒業寸前のあわただしい時期であることがその理由であろう。一方一年生が多いが、これから大学生活を充実していく時期に活動の範囲を広げ、他学部の学生と共同の活動をし、建学の理念を学ぶことは非常に意義深いことと考えられる。

特にこのスキーキャンプで注目したいのが、リピーター（複数回の参加者）の存在である（表１）。各回のリピーター数の合計である延べ人数は299人であり、実数でも225人に上っており、４回参加が８人、３回58人、２回159人であった。23回の平均のリピーター率は19.4％（13人）と高い。その内に、参加人数としては１割強である４年生のリピーターは期間全体で80人あり、平均すると毎年数人がこれに該当する。このように、初めは役割グループの一員として参加し、次からはリーダーとしてこのキャンプを運営していき、４年生のリピーター数人の内の一人が学生チーフとして全体をまとめていくという構造が定着していたところが、スキーキャンプの内容充実のひとつの要因であったと考えられる。



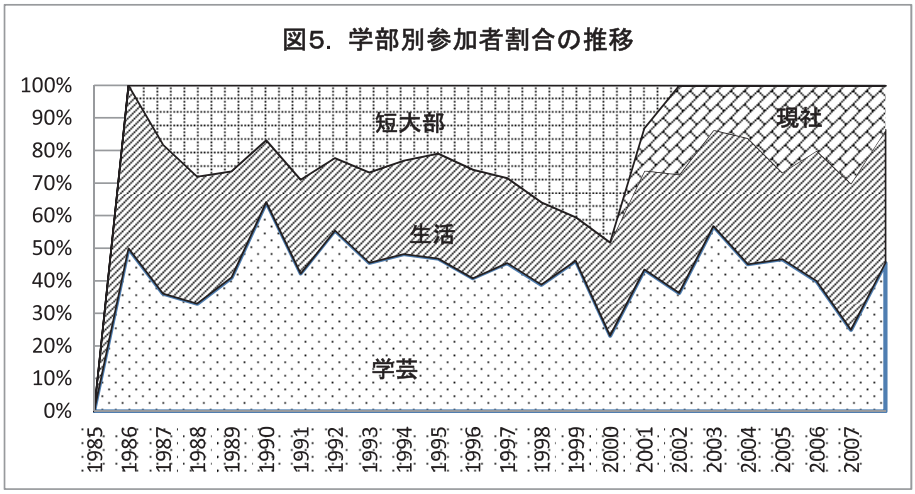


図6．学年別平均参加者割合
1985-2007

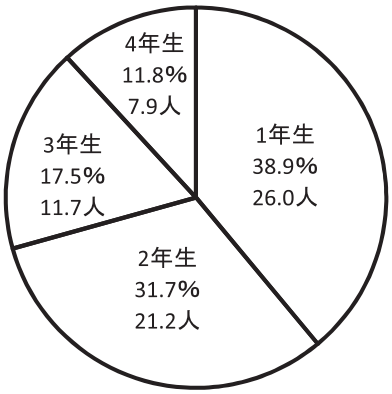


表1．リピーター数と割合

	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	合計
4回目	0	0	0	1	0	0	2	1	0	0	1	0	0	0	1	0	1	0	1	0	0	0	0	8　人
3回目	0	0	5	0	0	3	3	7	5	4	4	7	1	6	1	3	1	6	0	3	1	1	5	66　人
2回目	11	7	5	12	6	16	17	11	14	13	18	11	12	11	7	9	8	11	7	4	5	7	3	225　人

																								平均
ﾘﾋﾟｰﾀｰ数	11	7	10	13	6	19	22	19	19	17	23	18	13	17	9	12	10	17	8	7	6	8	8	13　人
参加者数	76	94	100	95	95	97	90	90	87	96	93	88	67	52	56	46	44	44	31	30	25	20	22	66.9　人
ﾘﾋﾟｰﾀｰ率	14.5	7.4	10.0	13.7	6.3	19.6	24.4	21.1	21.8	17.7	24.7	20.5	19.4	32.7	16.1	26.1	22.7	38.6	25.8	23.3	24.0	40.0	36.4	19.4　%

Ⅲ．2　スキー講習の側面から

Ⅲ．2．1　指導講師のレベルの高さと連続性

指導講師はほぼすべて大学でスキーを教えている教員であり、大半はスキーの専門家と言えるレベルの指導者であり、なおかつ本学で体育実技授業を担当していて、本学の学生の状況を把握している講師も多い。また、のべ45人の外部指導講師の内19人が大学の一回りである４回以上、さらにその内８人が８回以上の講師であり、体育の専任教員と合わせると10人の指導者がそれに該当する。そのため受講学生の傾向も良く把握した上で一貫性のある質の高い指導が展開されることになる。

さらに、専用の指導者用テキスト（A5版50頁）も作成されており、講習全体の統一性も図られていた[注3)]。

Ⅲ．2．2　スモールグループによる量的・質的に充実した講習

基本的に効率の良いグループ学習が進められると考えられている６−８人をめどとした能力別グループで、午前９時から午後４時までの間、適度に昼食と休憩を挟んで４日間続けられる。この間自由滑走の時間は設定されておらず、常に講師の指導の下で活動が行われるので、講習は時間的にもまとまった長さで、指導者の質の高さも相まって、内容も充実したものであった。

Ⅲ．2．3　4日間のスキー講習の特徴

スキーキャンプにおける学習過程は次のようなプロセスによって進められる。

1日目は新しい体験と各自現状の確認

2日目は技術習得による楽しみや喜びの体験

2日目後半から３日目にかけては、より高いレベルに挑戦するため、思い通りに進歩せず、怖さ、不安、もどかしさやいらだち、できるようになると思えない意欲や自信のなさと身体的・心理的疲労と重なって技術的進歩が足踏み状態になる。同じ悩みや壁に直面することによって、メンバーの共感的理解が高まり、自然発生的にメンバー相互の助言や励まし合いが生まれ、一体感が高まる。

4日目になると最終日であることから頑張る元気が出、新しく習得したより高いレベルの技術によるスキーができることの喜びと共に滑りを楽しむことが出来るようになる。初日と比べて明らかに違うレベルの新しい自分を発見する喜びが体験できる。

Ⅲ.3　役割分担グループによる自主的運営と出番の多いプログラム

役割グループによるキャンプ運営は、学生部が主催することになったスキーキャンプのひとつの中心的方向性である「サマーキャンプシステムの導入」を具現化したもので、他大学におけるスキー実習と比較して最も大きな特徴である。ここですべてのメンバーが、キャンプの運営者になり、それぞれの課題をグループメンバーと役割分担し、コミュニケーションをとりながら、他のキャンプ参加者に働きかけて課題を遂行するという経験をすることになる。他の人の前で話したり、指示して動かしたり、また他の人のケアをするのはそれぞれのメンバーの成長に大きな役割を果たすことになった。さらに礼拝等での奨励、毎食時のテーブルスピーチ、静ファイヤーにおける楽器演奏など役割以外でも様々な機会に多くの出番がセットされていたことも参加者の自己啓発の大きな機会となっていたと考えられる。

Ⅲ.4　礼拝等を組み込んだ建学精神の涵養

主題、主題聖句の設定、開会礼拝と閉会礼拝、毎朝の礼拝、そして静ファイヤーと多くの宗教行事が取り入れられ、参加者が建学の精神をよりよく認識することを目指している。

ほとんどキリスト教徒がいない中で、参加者は、通常の礼拝やリトリート参加者などを中心に、礼拝班や静ファイヤー班のリーダーシップの下で聖書を読み、讃美歌を歌い、奨励や祈祷をする。これが、同志社のキリスト教主義教育、つまりキリスト教や聖書を手掛かりとして、建学の精神を理解し、生き方を考え、学ぶ機会となっている。

Ⅳ. まとめと考察

1985年度から開始されたスキーキャンプであるが、1986年度の田辺キャンパス開設と短期大学部の新設、という本学において非常に大きな展開を契機として、その後約10年間最も盛んで活気ある行事であり続けたことは、２つのキャンパスと２つの大学（４年制大学と短期大学）の一体感の醸成にも象徴的な機能を果たしたと評価できるだろう。スキーの人気の高まる社会情勢の中で、参加回数を重ねる毎に、より上位の講習班で新しい体験と達成感が味わえるスキーの特性を生かす優れたスキー講習に基礎づけられ、多くのリピーターが集まった。そして、活動内容をよく理解したリピーターたちがリーダーシップを発揮することで、文字通り、学部・学年の異なった多くの学生たちが一体となって活動するプログラムが可能となった。さらにその中からリピーターが育ち、キャンプを盛り上げていく学校行事であったと言える。特に他大学のスキー実習と違い、学生部が主催するキャンプ活動として、スキー技術の講習と同時に役割グループによって参加者が運営するシステムを構成してプログラムを進めたことが、学生部のもくろみ通り、スキー技術の習得に止まらない多くの成果を上げたと言えよう。

スキーキャンプがこのように充実した活動になった理由として、野崎のリーダーシップと担当の学生部スタッフの真摯な取り組みも挙げておかなければならない。

まず野崎は、YMCA 同盟のスキーテキストの著者（野崎、1991）であり、京都 YMCA のスキー指導活動を長く統括したスキー指導の専門家であり、大学レベルにおいてもスキー指導の研究会や研修会の有力メンバーでもあった。その豊富な経験や知識を生かして、場所の設定から始まって、プログラム、講師の選定、指導方針等、スキーキャンプのすべての側面において強いリーダーシップを発揮した。また、歴代の学生部スタッフは文字通り計画・準備、学生募集、役割グループの設定と学生指導と配慮の必要な多くの業務を遂行し、さらにキャンプ中は文字通り、睡眠時間を削ってスキー講習と役割班ごとのグループワークのサポートをすることでこの充実したプログラムの遂行を支えてきた。これらのことがなければ、スキーキャンプは成立しなかったであろう。

残念なことにスキーキャンプは参加希望者が減少したために終了した。最も大きな理由はスキー人気の衰えであることは間違いないと思われる。しかし、その他にもいくつかの理由は考えられるかもしれない。ひとつは５泊６日という日程の長さである。また、このキャンプの目的を生かすための特徴である役割グループによる自主的プログラム運営や、建学の理念教育のための礼拝なども、現代の学生の生活パターンや学生気質にフィットしなくなっているのかもしれない。あるいは学生それぞれが個人的に、もしくは少ない仲間と日常的に気楽に体験活動や旅行に行くようになっている現在の状況の中で、体験的活動を中心とする学校行事が学生に与えるインパクトが依然と比べてはるかに小さいものになっている可能性も考えられよう。

いずれにしてもこれらは推測にすぎない。今後、学校の課外教育活動のあり方そのものから始めて、様々な側面をさらに検討し、試行錯誤していく必要があると考えられる。

注

注１）野崎への面接聞き取り調査（2014年８月20日）とその後のメール等による問い合わせなどによる。

注２）「レジャー白書」、「スポーツに関する世論調査」などに示されているがスノーボードを含むかどうかで数年の差異があるようである。

注３）同志社女子大学指導者用テキスト：「スキーカリキュラム ── スキー技術指導の実際」全 A5版50頁。配布された年度の記録はないが〈引用〉の（野崎、1991）が出版された頃であり、そこからの部分転載であると推測される。

引　用

小泉利久、1983a、昭和59年度　教育基金に係る援助金申請書、「同志社女子大学スキー実習」、申請者：学生部長・小泉利久、昭和58年11月30日

小泉利久、1983b、昭和59年度　教育基金に係る援助金交付願、「同志社女子大学スキー実習」、申請者：学生部長・小泉利久、昭和58年11月30日

小泉利久、1985、「同志社女子大学スキー実習」、同志社女子大学教育基金運営委員会、『教育基金に係る援助金実績報告書　1984年度』pp. 10-11

小坂賢一郎、1986、「サマーキャンプ」、同志社女子大学広報誌『しばくさ』第25号、pp. 23-31

野崎康明、1982a、昭和58年度　教育基金に係る援助金申請書、「スキー実習」、申請者：一般教育主任・武邦保、 実行責任者・野崎康明、昭和57年11月25日

野崎康明、1982b、昭和58年度　教育基金に係る援助金交付願、「スキー実習」、申請者：一般教育・野崎康明、昭和57年11月25日

野崎康明、1984、「5. スキー実習」『同志社女子大学教育基金運営委員会、1983、教育基金に係る援助金実績報告書　1983年度』pp. 17-18

野崎康明・松下唯夫、1991、ザ・スキーキャンプ―指導者のためのハンドブック、山口書店

鴛渕詔子、1980、起案書「冬期キャンプの件」、1980年４月28日：起案：学生部長　鴛渕詔子